

S.Okada



# 優駿

1985年3月27日生 牡 芦毛  
 父ダンシングキャップ  
 母ホワイトナルビー(父シルバーシャーク)  
 馬主/小栗孝一氏→佐橋五十雄氏→近藤俊典氏  
 調教師/鷺見昌勇(笠松)→瀬戸口勉(栗東)  
 生産牧場/稲葉不奈男氏  
 通算成績/32戦22勝(うち地方12戦10勝)  
 総取得賞金/9億1251万2000円  
 主な勝ち鞍/88・90有馬記念(G I)  
 90安田記念(G I)  
 89マイルチャンピオンシップ(G I)  
 88・89毎日王冠(G II)  
 88高松宮杯(G II)  
 88ニュージージーランドT4歳S(G II)  
 89オールカマー(G III)  
 88京都4歳特別(G III)  
 88毎日杯(G III)  
 88ヘガサスS(G III)  
 馬名の由来/冠名+父名の一部

## OGURI CAP's Impressive Scenes

S.Okada



芦毛対決、ライバルに雪辱  
1988年有馬記念(GI)

前2戦で立ちふさがったタマモクロス。直線、迫るライバルに最後まで並ばせずにGI初制覇を飾るとともに、「芦毛の先輩」超えを果たす

S.Okada



死闘、そして規格外のレコード  
1989年ジャパンC(GI)

マイルチャンピオンシップから連闘で臨む。先に抜けたホーリックスを追うも、クビ差及ばず。勝ちタイム2分22秒2は当時の世界レコード

S.Okada



大団円のラストラン  
1990年有馬記念(GI)

直線坂上で先頭に立ち、後続を振り切って勝利。大敗続きからの劇的な復活劇に、観客からは「オグリコール」が巻き起こった

第 3 位

38620 P

前回3位

→ 変動なし

# オグリキャップ

芦毛の怪物は不滅のアイドルに

年代別・性別ランキング

10代……9位	50代……2位	男性……3位
20代……5位	60代……2位	女性……2位
30代……4位	70代……2位	
40代……2位		

40代以上から厚い支持を得る

**Voter's Voice**

競馬に対する世間の考え方を大きく変えた馬(50代・男性)●今日の競馬隆盛があるのは、オグリキャップのおかげ(50代・男性)●当時も今もあえないローテーションで、期待以上の成績を残した(50代・男性)●ラストラン。中山まで見に行っただけ、人が多くて、モニターでしか見られず残念だったけど感動したなあ(60代・男性)●現在の競馬の立ち位置の土台を完成させた馬はやはりオグリだと思ふ(50代・男性)

時代、毛色、個性的なライバル：全てが合致し、奇跡は生まれた

オグリキャップは「時代の寵児」と呼ぶに相応しいスーパースターだった。地方の笠松出身で、良血とは言えない血統。さらに、クラシック登録がなく、同年の旧4歳馬とは別路線を歩まなくてはならないという不条理を抱えていた。それでも中央のエリートたちをなぎ倒し、連勝街道を突き進んだ。世はバブル経済真っ盛り。家柄や学歴で劣っても、才覚と努力で成り上がり、逆転できる時代になっていた。オグリはそんなサクセスストーリーを、ひたむきな走りで見せつけたのだ。競馬に詳しくない人にも見分けやすい芦毛というのよかった。中央入りして初めて自身を凌駕し得る強敵とし

て立ちはだかつたのが、同じ芦毛のタマモクロス。その「芦毛対決」というわかりやすい構図も、人々の目を惹きつける力になった。古馬になってからも、イナリワンやスーパークリク、バンブーメモリーといった強豪たちと数々の名勝負を繰りひろげた。個性豊かなライバルに恵まれたことも、この馬の魅力をよりいっそう際立たせる結果となった。

金銭トレードで馬主が替わるなどの人間たちのエゴをよそに、ひたすら全力でゴールを目指し、ファン的心をわしづかみにした。競馬とは無関係のパラエティ番組で、女性タレントが突如「オグちゃんか……」とその走りを思い出して号泣したこともあったほどだ。何よりドラマチックだったのは、引退レースとなった90年の有馬記念だった。安田記念をテン乗りの武豊騎手の手綱で勝ったが、宝塚記念は3馬身半離された2着。天皇賞(秋)は6着、ジャパンCでは11着に大敗するなど極度の不振に陥っていた。「燃え尽きた怪物」などと呼ばれたオグリはしかし、再び武騎手を鞍上に迎えた引退レースの有馬記念で劇的な勝利をおさめる。

中山競馬場に詰めかけた17万7779人のファンによる「オグリコール」でスタンドが揺れた。この勝利は「奇跡のラストラン」として、競馬史に残る伝説となった。

All Time THE BEST 100 HORSES